

鳥取県の園芸及び梨栽培の現状と将来

足 立 康 一

鳥取から来ました足立といいます。私はきのうの夕方、夜行に乗りまして、約 12 時間かけて東京にやってきました。天気が非常にすばらしいもので、やはり山陰とこちらの東京といいますか、関東との天気の差をつくづくと感じたところです。

この前の日曜日から雪がずっと降り続いていまして、11 年ぶりの大雪で山間地の北部の梨の木は相当傷められています。枝が折れたり、木の根元から割れたりというようなことで、何億円という被害が出ると予想がされています。

鳥取県というのは、東京からみますと西の方のずっと向こうになりますが、こちらでは鳥取と鳥根の位置が全然わからない方もおられるのではないのでしょうか。山陰という中で、どちらが東京に近くて、どちらが東京から遠いんだと言うときに、鳥根が鳥取かというのははっきりしないんですけれども、地理的には一応鳥取県の方が近いです（笑）。しかし、交通の便は鳥根の方がよくなっていて、鳥取県はまだまだ高速網なんか十分に発達しておらず、一部、米子から中国縦貫道へ抜ける高速ができていますが、そういう面で、我々の梨の販売というところにも大きな影響を受けております。

(1) 鳥取県の園芸について

鳥取県というのは、大山という米子の方にある山と、一応日本一広い砂丘だと言われていて鳥取砂丘で代表される地域です。

鳥取県の園芸は、梨をはじめスイカ、ネギその他いろいろあるんですけれども、まず最

初に、大まかに鳥取県の園芸について述べてみたいと思います。

まず梨ですが、県中部——私の住んでいます赤碕というところは中部になるんですけれども、中部と鳥取市を中心とした山間地を含めた東部が梨栽培の中心地域になっております。約 3 千ヘクタールを栽培しております。

私は梨を作っていますので梨のことを主にお話しいたしますが、鳥取県では、中部がスイカの大きな産地となっており、大栄町、倉吉市というところを中心に約 700 ヘクタールで栽培が行われております。鳥取産のスイカはなかなか東京まで来ていないと思いますが、今回地震があった京阪神、あの辺で大栄スイカといったら、一つのブランドであり、西日本 1 番の産地として知られています。

そのスイカ自体も戦後から復興してきました。例えば、大栄町では約 370 ヘクタールのスイカを、ハウス、大型、中型、小型トンネルにより作っています。露地栽培は現在ではほとんどありません。その時期に大栄町に行くと、ビニールで畑一面が真っ白くなっていて、こんなところでこんなにスイカを作っているか、というところを見ることが出来ます。

そのほか、鳥取県で全般的に作られているんですけれども、シロネギという作物があります。これは、平成 5 年で県西部の米子市を中心に 700 ヘクタールぐらい作られており、50 億円の売上げを突破しました。50 億円という数字が大きい小さいかはわかりませんが、鳥取県としては、野菜单品でそれだけの売上げがあるというのは非常に大きいのです。

先ほど申しあげましたスイカが、大栄町の370ヘクタールで、平成6年、干ばつの年でしたが、一つの農協で35億円の売上げをあげています。だから、1反100万円ぐらいの売上げになっていますが、我々鳥取県としては、ネギの方も大きな商品になっております。

ネギ自体も近年、周年栽培という方法が取り入れられまして、昭和30年ごろは秋冬ネギというのが中心でしたが、現在は、春ネギ、夏ネギ、秋冬というぐあいに年中ネギを作っている、これも京阪神を中心にして出荷しているということが、ネギ栽培では大きく変わってきた点だと思っております。

また、鳥取県では、知られているか知られていないかよくわかりませんが、昭和33年ぐらいから芝の生産が始まりまして、東伯町を中心にして、生産芝といいますか、野芝とか高麗芝とかという、ゴルフ場とか緑地関係で使う芝を1,400ヘクタール、これは栽培というか、何というか作っています。

私は梨農家ですので、感覚的に、何であんなものを作るのかなということを感じます。というのも、芝は、我々梨農家から見ると土を売っているとしたかと思えません。芝を切って出荷するごとに、2センチぐらいとかいうふうに、だんだん土が下がっていくわけです。まさしく、土を売っているという感覚で我々はみているんですけれども、このごろは景気の問題があって、芝も1年1回切ってもらえるかももらえないかということで、なかなか大変なようです。

私は梨を作っていて、よくおじいさんに言われるんですけれども、梨を作っている人間は、友達とか、学生時代に世話になった先生とかに梨を送るんですね。私でも家内と合わせて10キロ入りで15、6箱、友達関係に送るんですけれども、芝を送るという家はないということで、やっぱり梨屋とか、そういう果実というか、果物を作っているところは何で送らないけんのかな（笑）。まあ、友達に

年1回のあいさつだということで送らせてもらっているんですけれども、芝屋さんには、芝を送ることはないだろうなということでぶつぶつ言っていることがあります、それはそれとして、芝もなかなか収入が上がらないという現状があります。

あと長芋が100ヘクタール、これは砂丘がありますので、そこを利用して作っております。長芋は大産地の青森、北海道というところに押されてしまって、以前よりは収入が上がらないということがいわれて、だんだん減ってきました。減ってきて100ヘクタールというところですよ。規模が北海道、青森と比べると全然違いますので、それ相当に経費はかかりますがなんとか、やっておられるというのが現状です。

スイカの後作には、重量野菜といわれるキャベツ、ブロッコリー、大根、こういうようなものが作られ、ハウスの中の後作はミニトマト、ホウレンソウ、キュウリとか、9月から12月いっぱい、早いと雪が降ると12月半ばぐらいで、後作みたいな形で導入されています。今年は、もう2月に入りまして、そろそろスイカなんかは施肥が終わって、畑を耕して、マルチをして準備という状況に入っていますけれども、雪があまりあり過ぎ、これは作業が遅れるなというのはもう目に見えていまして、10から15日は遅れていくというのはしょうがないという感じです。

(2) 梨栽培の歴史

— 二十世紀梨の歴史を中心に —

関東では梨といったらやはり赤梨、以前の長十郎という梨から幸水、豊水であり、二十世紀は進物用でしょうか。一般的に皆さんに食べられているのは赤梨の幸水、豊水でしょうし、鳥取県の梨も関東にも来ているのですが、量的には少ないようです。

以前、大阪だけでなく、何とか東京に二十

世紀を、おいしい梨を作っていっぱい送りたいなと同志会の仲間でしゃべっていたんですけれども、なかなか十分にそれができず、地団駄を踏んでいます。我々鳥取県の梨は二十世紀という青梨の歴史です。

二十世紀梨は、今から約 100 年と言われているけれども、100 年前に東京の隣の県であります、千葉県の松戸市の方がごみ捨て場より発見されたという品種で、それが千葉県から鳥取県に導入されました。だから、もとは関東のものだったということです。

資料を見ていただければいいんですけれども、北脇永治さんが明治 35 年に二十世紀梨を導入しております。このように戦前から栽培されていたのですが、そのころは本当に苗木といいますか、穂木をぼつぼつともらってって、それをどんどん増やしていった。急激に増えたというのはやはり戦後の 25 年ぐらいになってからです。

この当時は、一般的に言われます猫もしゃくしも二十世紀梨という時期だったと思います。その中で規模拡大を図っていきまして、山を切り拓いて、不適地といいますか、高度があり赤土の固いところにも梨を作っていく。梨を作っていけばもうかるという時代がありました。その当時、梨を作らないと鳥取県の農家じゃないんだということも言われた時期です。もちろんその当時、お嫁さんも梨農家に行くのが一番幸せになるんだと言われていましたけれども、今は見る影もありません（笑）。これは事実です。

その後、梨をどんどん増やしていたんですけれども、うまい梨を作らないとやはり消費者に喜ばれない、おいしい梨を作らないと、やはり農家はもうからないんだということになりました。うまい梨づくりという運動が始まりました。技術的にいうと日当たり剪定、光がいっぱい当たるとおいしい梨ができる。まあ、何でもそうなんですけれども、そういう篤農家から学んだ技術を一般農家に伝える

という手法をとりまして、うまい梨づくり運動が始まりました。

ところが、その中で——鳥取県というのは、産学官の指導といいますか、生産者、学識経験者として鳥取大学を中心とした学者さんグループ、あと関係団体、農協や県の指導普及センター——今普及センターとっていますけれども、そういうところの交流の中でおいしい梨を作ろう、うまい梨づくりということでやってきまして、技術を画一化していったのです。

技術の画一化は、だれでもいい梨が作れるようにしていきたいということで、技術が一つのマニュアル化していったわけですが、農家自体もいろんなレベルの方がおられまして、梨畑に見に行かれて、梨の木を見ていい木だなと言って剪定を見られて、それで自分の梨畑に帰ってみると、剪定ができないんですよね。剪定というのは一つの技術ですから、見に行ったときには、うん、これはいい剪定だと思っても、いざ、自分の畑に入ってはさみを入れようとするとう手が動かない。あれはどうだったかな。そういうので、なかなか技術が一般化できない。その辺で、日当たり剪定といわれて、どんどん大きな木をぼーんと切りますから、樹勢の低下というところで、木が傷んで収量が落ちるという時期がありました。

その後、品種問題として、先ほどから何回も言っておりますが、鳥取県といえば二十世紀、あとそれに対抗した新水、豊水、幸水という三水の時期との問題が出てきます。変な話ですけども、鳥取県では二十世紀梨以外の梨を「雑梨」という表現をするのです。今の若い人は品種の名前を言うようになりましたが、うちのおじいさんというか、今 60 代前後の方は、豊水、幸水、そういう梨を雑梨と言います。二十世紀で大きくなってもうかったから、あとは補完的なというか、雑な梨だという表現をし、何ということをするんや

ろかなとも思うのですが、やはりそういう二十世紀におんぶに抱っこだった産地だということの言葉としてのあらわれだ、という感じがしております。

それで、鳥取県も新水という梨を導入したのです。それも一応大学の先生たちが研究されて、三水の中で鳥取県は新水がいいだろうということになりました。というのは、新水は二十世紀よりも出荷の時期が前なのです。大体7月の終わりから8月の初め、俗に言う盆前ですね。二十世紀が大体8月20日過ぎから出てくるのですが、あとの幸水とか豊水という品種は、二十世紀と収穫期が真正面からぶち当たっちゃうんですね。だから、そういう収穫期にぶち当たらない新水を入れようということでした。

それが大きな間違いだったというのは、資料にも出ていますけれども、新水は、最初は交配しなくてもよくて、黒斑病という病気に強く、非常においしい梨だというふれこみでした。確かにおいしい梨です。新水というのは糖度が13度から14度の梨になりますので、おいしい梨なんですけれども、梨が大きくなりません。小玉の梨です。大きくなっても300グラムで、小さいということによってちょっと見覚えが悪いわけですね。そして、収量も上がらないんです。これは品種特性が持っているものなんですけれども、根がどうしても走ってしまうので、花芽のつきが悪く、来年の結果数量が十分に確保できないということで、収量が2トンいかない、2トンもいけば立派なものだということです。品種の問題としては、後から考えた結果論的ですが、二十世紀梨に固執した鳥取県でなかったかなというぐあいに私は思っております。

(3) 梨栽培の現状

梨も戦後すぐ植えても50年になるわけですから、梨の木も年をとりましたという

ことだけではなく、それとともに生産者も年をとりました。高齢化・後継者不足というのはどの産地でもありますし、そういう影響を受けて、生産量とか後継者の不足ということになります。

二十世紀梨の出荷数量というのが、昭和60年前ぐらいからどんどん下がってきております。これは今も下がり続けております。面積も減り続けております。

二十世紀梨が一番多かったときには約3千ヘクタールありましたが、平成2年では2,360ヘクタールと、約700ヘクタール減少しました。あとの豊水とか新水も半分ぐらいに減っているのですが、幸水、新興というような梨は横ばいか伸びているというところですね。日本梨生産における鳥取県の地位ということで、鳥取県の日本梨の栽培面積は3,210ヘクタールで、割合で全国の16%を占め、その他主産地と比べて倍近くあるところなんです。あまりにも二十世紀梨に偏り過ぎております。

高齢者問題とか後継者問題はどこでも言われまして、私も昭和60年に就農して10年になりますが、その後、私が住む赤碕町という約1万人ぐらいの農業が主な町で、梨栽培農家として新しく就農したのは10年間で1人です。だから、それだけ梨は魅力がないのかなと思ったりしますけれども。

梨というのは、1年中仕事がある栽培形態といえますか、農業なんですね。今の時期は剪定誘引という棚につける仕事から、その後、4月に入れば交配、そして袋かけ作業が延々7月の頭まで続いて、7月終わりに来たらもう8月から出荷、8月から9月半ばまで出荷しておいて、その後、もう次の年の穴掘りとか、せきとか作業が始まっていく。年中休み暇がない作業です。

高齢化、後継者不足、特に高齢化の中で、面積を増やしたくても労働力不足ということで、皆さん動ける人は、ほとんど何らかの形

で勤めを持っておられますから、特に手間のかかる人工交配とか袋かけのための人手がないんですね。75歳とか、そのくらいのおばあさんに1日6,000円、7,000円出すから、袋かけを手伝って交配をお願いしますと言っても、やってくれる人がいないという状況になってきております。だから、面積もふやすというのはなかなか難しく、そういう労働力不足はもう慢性的なものになっております。

二十世紀梨というのは、小袋という小さい袋と大袋の2回の袋かけをやります。小袋は、5月の連休明けぐらいから摘果という作業が始まりまして、その後、6月10日ぐらいから大袋かけが始まります。

黒斑病というのは非常に恐ろしい病気で、特異的に二十世紀梨に非常に猛威を振るう病気です。ですから、梨は最低で20回、多い年は25回も消毒が必要です。ですから、1ヵ月の間に4回、ひどいときは5回、雨が降ったらSSに乗って入って、それで袋かけの途中でも雨が降ったらまた入ってという、まさに消毒まみれになって仕事をしております。それはやった人でないとわからないのですけれども、私なんか手散布で離れた畑をやらなければいけませんから、1反するのに、準備から何とか入れて2時間、それもざあっとやっている顔にばあつかかって、風が吹いたらものすごく大変な作業です。そういう中で梨が作られているということは、なかなか知られていないことですが、

今の消毒の問題にしても、袋をかけたなら、なかなか果実に消毒がかかることはないのですが、20回、25回と消毒をやっているというのが現実ですから、その辺はやはりいいのかな、悪いのかな、今の減農薬の時代の中で、こんなことでいいのかなということは感じております。

平成6年は猛暑で、黒斑病が一部では出ましたけれども、非常に少ない年で、生産者はほっとしているのですが、その前の平成5年

の冷夏、長雨の年は非常にひどいものでした。私の家で梨を作っていて経費を払ったらゼロになり、結局、金を借りないと生きていけないという年でした。というのは、二十世紀梨というのは経費が非常にかかりまして、100万円の売上げがあがるとすれば、60万円ぐらい、もっとそれ以上かかる場合があります。消毒代、袋代、あと梨の選果場に持って行って共同選果しますので、その人夫賃とか、箱もいい箱を使わないと梨が傷みますので、そういう経費が非常にかかって、たとえ売上が100万円あっても、手元に残るのが40万あるかないかぐらいで、1町やっても、うまくいって400万円しか残らない。

ところが、一昨年は冷夏、長雨の影響で梨はおいしくないし、水っぽいのはいいんですけども、糖度が乗っていませんので、ご記憶があると思いますが、昨年の干ばつのときに食べられた梨と、その前の年の梨とは雲泥の差があるんですね。それほど天候によって味が違うもので、赤字にはならなかったけれども、経費を出してしまったら、売上げもなくなってしまったという状況の年でした。今年もこういう天気ですから、多かれ少なかれ異常気象というか、異常気象になるのが当たり前と踏んでいた方が、我々もちゃんとやっていけるようになると思うのですが。はじめからいい天気であればいいのですが、その辺のところを頭に入れながら農作業というのは進めていかなければならないと思っています。

続きましてハウス栽培ということに関して申し上げますが、二十世紀梨もハウスで栽培するんですね。ハウスで栽培すると、8月の3、4日から市場に出せ、それがハウスの一つのメリットになっています。というのは、その時期は青梨というか、そういう梨はないですから、高単価で売れ、約200万以上の反収が稼げるということで、農家にとっては非常にメリットとなっています。また、労働力

の分散ということで、交配作業、摘果作業が1週間以上、中には10日ぐらいずれますので、たくさんの面積、二十世紀を7反も8反もやってられる方は、そのうちの2反をハウスにすると、労働力が分散できます。労働力の分散で、そういう施設化が行われていて、今50ヘクタールぐらいですか、進んでいますけれども、ほぼ限界だなという感じがして居ります。

というのは、先ほども申し上げましたが、ハウスでも黒斑病が出たりしますし、そういう中で、無理な栽培をするものですから、樹勢が弱ったり木が傷んでしまって、2年ぐらい作ったら、1年間はビニールかけずに露地にそのままにして梨栽培を続けるということになります。したがって、面積自体は増えても、あと10町歩も増えるか増えないかぐらいじゃないかなとは踏んでおります。

続きまして、「輸出の歴史と現状」についてお話ししたいと思います。

二十世紀梨の輸出は、昭和8年が最初で、大分昔です。現在の中国、韓国、台湾に、3,361箱、約44トンが輸出されたのが始まりです。資料に二十世紀梨の貿易の年表を載せてありますので後ほどご覧下さい。鳥取県では、二十世紀梨の全体の輸出量の約85%から90%を占めています。

日本国内から輸出されているものは、梨をはじめ、温州みかんなどがありますが、現状では梨がダントツに多いです。これも昔、鳥取県果実連とっていったところが、一生懸命輸出の交渉をし、まず東南アジアから始めて、徐々にいろんな時代を経、苦労されて、それで現在の状況に至っているわけですが、そのような努力の上に二十世紀梨の輸出が行われております。量的には、大体昭和59年前後が一番多くなっていましたが、今はだんだん減ってきております。

私が就農した60年ごろが最盛期で、その前年59年からアメリカ本土への輸出が始ま

りました。この輸出向けの梨を作るのは大変な手間が必要です。黒斑病にかかっていたらダメ。クワコナカイガラムシという虫がいるんですけれども、それがいたらダメということで、そういう梨園を作るために、アメリカの検査官が回ってきたときには、畑をきれいにしておかなくてはなりません。黒斑病にやられている葉っぱがあったら、そこは貿易中止ということになり、今までやってきた努力が水の泡になりますので、一生懸命やらないかん。

出荷というか、梨の選果自体も、普通の国内向けの場合、梨が流れていくスピードを10としたら、それが5ぐらい、あるいはそれ以下で、虫なんかがいったりするともうとろとろと流れて、アメリカに送るときには、それこそ1日の選果量が5分の1ぐらいの量になってしまいます。

当時はまだ200円台の為替レートでまずまず採算は合ったんですけれども、今は100円を切りまして、本当は100円ではもう合わないんですね。1個の梨が高級の専門店なんかに行くと、いい大きい梨で1個500円ですからね。そういうように5ドルかかるような梨なんていうのは、この時代、なかなかよう作らんです。だから、貿易量というか、輸出量も減ってきております。

私も携わってまして、本当に貿易は面倒くさいなと思っていたんですけれども、立場を変えて、そういう輸出に携わっている果実連の方の大変な労力が、その当時は見えていなかったということで、非常に肝に銘じるものがあります。

(4) 将来と生き残り戦略

ここからが本題になるのかもしれないので、すけれども、まず、「ゴールド二十世紀」の導入について申し上げます。

これは農水省のつくばの試験場で作られた

もので、ガンマ線を照射されて、黒斑病に対して非常に強いという変異体ができまして、それを今、私もまだ1反ですけれども、植えつけをやっているんですが、栽培技術が十分に確立はされていません。

というのは、農家というのは欲なもので、病気が出なければ肥料をたくさんやりたがるんですね。肥料をたくさんやったら大きな梨ができるという認識がまだまだ非常に強くて、それで、肥料をやり過ぎたり、それだけじゃないんですけれども、新植した、改植した園なんかでは、紋羽病でばんばん梨が枯れておりますので、まだ十分な軌道に乗っていません。また、昨年ぐらいから出荷されているのですが、手間を省略するために、黒斑病にかからないから袋かけを1回にしようということをしているんですが、二十世紀のみずみずしい緑のきれいな肌を保つには2回がけしないとたないんです。

黒斑病にかからないから、ざらざらした、ちょっと見ばえが悪い梨を作っていくのか。進物なんていうのは、親戚に送ったり、お客さんに送ったりするもので、やはりつるんとしたきれいな梨の方が喜ばれると思う。多分両方の栽培の方法が、すなわち進物用の2回がけするところと、一般用の1回がけをするところと分かれるのかもしれませんが、まあ、いずれにせよおいしくしないといかんのですけれども、そういういろいろな技術が今後作られていくと思います。

次に資料であげたT-17号というのは、地元の鳥取大学で作られた品種です。これは自家結実性で黒斑病に強いという赤梨です。自家結実性というのは、梨というのは全部交配しないという梨ができないのですが、それは交配しなくても、風が吹いて、花粉が自分のところに落ちることによって、それで結実するという梨です。

だから、手間がある程度かかりません。花取りなんというのはどんな作業かと思ったら

もう大変な作業なんですけれども、そういう手間が少しでも減るよということ、今年ぐらいから徐々に増やしていこうということになっています。

味は幸水という品種よりも、食べた人はいいと言っています。私はまだ食べていませんが、十分にいける梨だということで、今後T-17号、どんな名前がつくかわかりませんが、これに期待して、こういう梨も輸出できるような段取りにしたいと思っています。

やはり日本は輸入国なものですから、特異的に二十世紀梨なんかを輸出しているというメリットはあるんですから、為替レートの問題はありますが、残していくよう頑張りたいと思っています。

先ほどもお話しましたが、安定的な収量をあげても、やはりおいしくなくてはだめですし、安全なというか、少しでも農薬を少なくするよう技術力を上げていかなくてはならないと思います。これからは、去年みたいなおいしい年はどんどん売れるし、まずくなると、もう消費者は知らんぷり、そういう具合に梨を作っている、我々は生きていけないんですね。

昨年は県でも最高の箱単価でした。3千7、8百円になったのかな。非常にいい年でしたが、その前の年は2千5、6百円。2千5、6百円というのは、先ほど言ったように経費なんですね。1箱1千2、3百円が所得として農家が生活するお金になっていくわけですから、その辺が常に安定するような経営を立てなければなりません。

それで、輸出の問題と兼ね合わせてですけれども、鳥取県において、今までの先駆者とか先輩たちの努力によって、二十世紀梨が日本で一番輸出品目になっていることはすばらしいことだと思っています。今後も為替レートの問題もあるんですけれども、その道だけはつぶしたくないということは、県農

の方も言うておられたし、お客さんに採算が合わないからやらないよと、今まで何十年かけて、60年近くかけて作ってきたパイプを切ってしまうということはとんでもないことですから、続けていてもらいたいなと思ってますし、続けていかなければ農家の方もだめだと思っています。

最後になりますが、終わりに当たってということで、少し述べさせてもらいたいと思います。

私は農業をやって10年、30歳から始めましたので、今年40歳になりました。その前はどこにいたかということ、学校を出て、農山漁村文化協会、通称「農文協」というところに5年間いまして、農村を回って本を売っておりました。それで、大学を出て、最初に長野に、野口さんのところですけれども、行きまして……。だから、もう15、6年前になりますが、農村を回っても悲観論ばかりで、「おれの代で終わりだ」とか、「農業はもうからん」とかということをおじいさん、おばあさんに、もちろん若い人も含めてですけれども、本を売っていくという商売をやっていました。5年間ほど、農村を走り回っていたわけですが、一部の若い農家さん、若い人たちの中には、「農業っておもしろいよ」と言う人もいますね。

そういう中で、私にも、「農業ができるかな」なんてとんでもないことを考えました。私の家は農家ではありませんし、私は長男でした。けれども、おやじやおふくろを泣かせて婿に行きまして農業をやり始めたんです。実のおやじやおふくろは非常に残念がっていましたが、私の夢として農業だってばかにするんじゃないというか、大事なものだという感じをその5年間で培われてもので、実際に自分も農業をしてみたいな、ということで農村に入りました。婿という形をとらないと、当時でも新しく土地を買ってやるとなれば、「1億、2億は平気でかかるよ」と言われて

いましたので、そういう金はない。それだったら、農村を回ってみれば、婿にこないかという声もいっぱいあるわけですよ（笑）。あつ、それだったら婿もいいんじゃないかというのでやったんですが、なかなかいろいろありましたけれども……。

レジュメに「儲ける農業——楽しい家庭・目標のある経営」ということを書いておきましたけれども、この10年間で何があったかといいますと、一番最初に、市内に住んでいて、おやじは公務員をやっていましたから、全然農業とは関係ないんですが、農村に入ってみると、農村の昔のよさがなくなってきたというのを一番に感じました。うちの部落なんかはみんな競争しているのですが、いい意味で競争すればいいんですけども、悪い意味の競争というか、あそこのあそこがだめだとか、ああだこうだとのけなし合いが家の中でされるから、そういう言葉を聞くのは嫌だなと思っていました。意識変革させないとこれはあかんぞと思ったんですが、50を過ぎた人間に意識変革させようかと思ったとんでもないことでして変わりません。私はそれをつくづく感じました。

本当のことを言うと、私は農家と書いてあるんですけども、2年ぐらい前から勤めもやっております。勤めをやりながら農業もやっています。たまたま結婚した相手といいですか、うちのお母さんは教員でした。学校の先生をしまして、1人でおじいさん、おばあさんと農業をやったら非常に孤独感というか、自分を後ろからバックアップしてもらう人がいないというのがあって、やはり農業というのは、「夫婦でやらないかん」というのをつくづく感じたんです。

だから、お母ちゃんが退職するまで、私がちょっと勤めに出よう。なかなか梨はもうからへんし、それだったら、今2人で働けば、そこそこの収入になりますし、子供もいるし、めどがたってから、また農業というのはやれ

るんじゃないか。できるだけいい意味で農業をとらえる、今の農村をとらえるということです。当時、農業をやっているときは、いつでも農業なんてやめられると思っていました。それで勤めに出たら、またいつでも農業に入れるという、いい方にいい方に考えるように自分はしております。

そういう中で、外から入ってきて農業の経験をしていない者が、農家の息子さんとかという人たちとつき合ってみると、非常に自立していないなという感じがするんですね。自分自身が自分の経営についての目標をきちっと持っていないと経営はやっていけないし、その一番根本になるものは家庭であると思います。人間が作物に対して仕事をしていても、やはり家庭というか、夫婦とか、子供とか、おじいさん、おばあさんとかと仲よくやるのが次の日のエネルギーになっていって、そういう中でみんなが協力していってもうかる農業につながっていく。

今までこういういろいろな農業関係の会合なんかに出してもらって、シミュレーションによって、こうやってこうやってこうすれば農家はもうかるんですよ、作物はこうやればもうかるんですよというのはいっぱいあるんです。でも、実際、その中でやっているのはやはり人間であって、その人間の気持ちが暗いときがあったり、調子がいいときがあったり、できれば一日中楽しくて、毎日毎日が楽しくて、あしたも元気、あさっても元気というんだったらいいんですけども、そういう具合に意識的に家庭とか、経営を作っていないと、今後、輸入自由化になった上で、全部悪い面、悪い面でつぶされていってしまっただけで、結局は日本の農業が敗退の道というか、退歩の道を歩んでいくのではないかなという感じがしています。

結局やっているのは人間なんだから、その人間が夢が持てるようなことを経営指導していく場合にも、技術をしていく場合にも、き

ちんちんと行っていかなければならないと思います。例えばお母さんに指導していく場合は、お母さんにわかるような指導をせなあかんし、若いお兄さんにすると、専門のおやじさんにするのは話し方も全然違ってくるわけですけども、みんな同じようにばつとやったところで、わからない人もいっぱいいるということを感じております。

一番最後になりますけれども、この前、ちょっと違った会合に出まして、今勤めている関係で、九州の宮崎に行って、そこでフォーラムに出してもらったのですが、そのときに、10年後は輸入野菜というのは60%ぐらいになる。ドールという会社が戦略を練っている。シミュレーションで、もうポストハーベストをしなくても、無農薬で輸入できるようなシステムも考えられているというんですね。我々が考えていないようなことをやる準備をドールとか、そういう輸入企業がやって、10年後には日本の野菜の60%は海外からの輸入になるだろう。そこまではっきり言っている中で、我々農家も、もっともっと勉強して、ある面では産地間の競争をしていかなければならないのですけれども、ある面ではお互いに情報の交換をして、みんなが幸せになる農業を作っていきたいな。

私も農業をやりながら、勤めをやりながら、そういう中で農村でみんなと一緒に闘っていききたいと思います。

以上で終わります。(拍手)